

K S K

きんづな

第164号

編集 神奈川県際作連
責任者 海原泰江
印刷所 錦Yuki Print
発行 平成31年2月5日
年月日

インタビュー

二〇二五年を見据えて 介護職人材確保・支援事業

厚木市福祉部長 野元 優子 氏

人材の確保について。この大きな、難しい課題に、直接的な支援(転入・復職・奨学金の返済への助成等)として市町村での事業を展開している厚木市の福祉部長にその経緯や市としての思いについてインタビューを行った。聞き手は当会六反副理事長。概要を報告する。



六反・人材支援の施策、今回三十年度から各種の助成をするという直接的な支援を行っていた

だいてます。県内でも例がない。高齢者の施設はわりと進んでたかと思いますが、障がいの施設も対象にというのが。本当に人材が集まらない地域もあり、うらやましい、すごいって話話を各地区の皆さんからお聞きします。それでは機会を見てお話をうかがいたいと思います。他市になく支援のレベルを上げた部分があるのかなという思いですが。

は、高齢者を中心とした高齢者のための地域包括ケアシステムでした。医療・介護・介護予防、住まいとか生活支援、高齢者へのシステムだけだった。厚木市が始めようとした二〇一四年ぐらいでした。高齢者だけじゃないでしょ？というのが気持ちの中にありました。厚木市が検討する際には高齢者も障がい児・者も、その枠に入らないひきこもりの方も、全部含めて将来を目指そうと。それにはシステムだけではなくて、居場所や、できれば街づくりも含めて、ケアシステムではなく、地域包括ケア「社会」を目指すのだと。この言い方をしたのは全国で厚木市だけです。そのあと国が高齢者だけではなく障がい者もと言いつたのです。確かに高齢者の方が進んでいる、だから絶えずそちらと同じように補助金は出していきたいという思いが芽生え、就職相談会もそのころから始まったと思います。かたや、人材がとてもしなくなっているということがあり、今の計画を作る前に二〇二五年までの介護人材の不足を、全部推計をしました。このままいくと大変なことになる。いくらAIとか

ロボットが進んでもとても収まらない。単にお金を出すだけでは、いろんな角度で。厚木市に来ていただける人がいたら、引越させたい。これからは今からやらないと間に合わないという強い思いがあり、高齢者と障がい者、全部一緒に始めよう。医療も始めました。もしかするとお金で、という声があるかもしれないけど、やれることはやろうと。毎年少しずつでも変えていけるものになっていけばと思っております。

六反・その直接的な支援の仕方ってあんまり過去に例がないのですね。その辺のところというのは割とスムーズに？

野元・過去にはないのですが、助成金という制度がベストかどうかという悩みはありました。財源もないし。実は一般財源は当てられません。今までの社会福祉基金に積み立てがあつてそれを財源に当てるといふことで財務にかけあつて。皆様からのご寄付をもとに、将来的に皆様に迷惑がかからないようにという形になってい

ます。財政はすごく厳しく、高齢者が増えてくるのに、一般会計は増えません。民生委員さんのご意見もお聞きし、かなちゃん手形（高齢者バス割引乗車券）の負担額も上げさせていただきました。敬老祝金は減らささせていただきました。バブコメをし、千人くらの方の声を聴き、かなちゃん手形は「年齢は下げないでほしい、外出支援になるから、でも全く使っていない方もいる。いざというときは行政にお世話になるけど、元氣な時は応援はしてもらいたいけど少し軽くしてもらいのは」というところで、代わりに、より重度な方にと、基金もきつかけにはなりましたがそれほど潤沢にあるわけではありませんので。

六反…まあそこで今現在、新しくなって間もないと思いますが、何かリアクションみたいなのはありますか？

野元…問い合わせはかなり多いですが、現実的に今日現在で申請があつた方は十五人です。もつと、と思いますがなかなか。PRポスターなんかも作っています。実際に人がいないということもあり、来年はもつと対象も広げていき

いと思います。ぜひ、もつとこういうところをというご意見があれば寄せていただければ努力します。

六反… 私たち現場の生の状況を聞く機会が、唯一は「市長との集い」があると思います。今後も続けていただければと思います。

野元…市長との集いはかなり大がかりです。私も現場の音が一番大切だと思つていまして、第一段階として、生の声が聞きたいということでの障がい入所施設だけですけど、集まっていたら私と関係の課長が皆出て、デイスカッションをしています。すごく大勢お呼びしても話がなかなか難しいということ。私としてはお互いの立場がわかつて、一緒にやっていかないとできませんし、当該の課長だけが聞いてもなかなか広がりが難しい。最近こんなことで困つてらっしゃるか、こういうところの問題じゃないですかとか。同じ形の特養と包括を持つている所ともやっています。あと老健。それを三つに分けて支援施設だけじゃなくて、相談支援事業所ともやっていて、（厚木市は各地区の地域包括支援セン

ターと障がい者相談支援事業所が設置されている）高齢と障がいの壁は取り払いたいと思つていいます。もちろん障がいの特殊性、難しさはありますが。

六反…今後というか厚木市で何かこれ言っておけばというがあれば。

野元…まあ今後というか、やはり地域包括ケア社会を目指すことです。障がい者も全部一緒に、とにかくそれを一番上に掲げて、二〇二五年を目指したい。自立支援をしたい。だからこそ優先調達法とか就労とかですね。しっかりとやっていきたいです。文書だけでなく、部長会議でも各部長に直接訴えています。やはり縦割り意識はまだ強いんです。所管でない仕事を背負うわけですから。私がよく課長に言うのは、障がい者って言う人はいないでしょう？、高齢者って言う人もいないでしょう？生活保護受給者っていう人もいない。ひとりの人の中にたまたま障がいがあったり、高齢になつていたりだと。だからもう絶対に縦割りではなくて、いざというときは家族も含めて、だから包括なのですけど、包み込んでや

ろうねって。とにかくそれを合言葉に、みんなと一緒に生きていける世の中を作っていきたい。その一つひとつのパーツが優先調達だったり人材確保だったりだと思

います。それだけはぶれずに行きたいと思つています。いざ二〇二五年になつたときに、「あんなに騒いでいたけどなんでもないじゃない」って市民から言われ

たら私たちが頑張つたってことだねって。やっぱり大変だつて言われないようにしたい。少なくとも二〇二五年の厚木市には責任を持ちたいという思いだけは本当に正直なところです。たぶん課長職の中、いや係長にもなっていない若手職員の中にも、福祉部の中にはかなりそういう思いを持った人間がいてくれると私は信じています。たぶん皆さんも同じ思いでいらつしゃると思うので、ぜひ、しっかりと手を組んで、一緒に力を合わせていきたいと心から思つています。

六反…心強いお話をたくさん聞かせていただきました。私たちもしっかりとやっていますので、今後よろしく願いました。ありがとうございます。

知的障害を伴わない 成人の発達障害者の理解

県央障害保健福祉圏域
発達障害者地域支援マネジャー
クロスオーバー大和

薄葉 寿恵

発達障害とは

近年、「発達障害」はメディア等で大きく取り上げられ、様々な情報を見聞きするようになりまし
た。発達障害とは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能障害であつてその症状が通常低年齢において発現するもの」と、発達障害者支援法で定義されています。しかし、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害」は、その特性の出力や状態像が多様であることから、連続体という意味で「スペクトラム」と言う言葉が用いられ、「自閉スペクトラム症」に変わりました。発

達障害の方々が抱える困難として、別表のような様々な特徴があげられます。

ところで、従来の「障害」は状態像が変化しないのが一般的です。しかし、発達障害の場合、同じような特性を持っていても、適応して生活できていれば障害とはなりません。特性の出力の度合いによって、生活のしづらさが大きく変わるところが他の障害との違いと言えます。

何が「生きづらさ」なのか

県央圏域の発達障害者地域支援マネジャーを受託して三年目になります。知的障害を伴わない発達障害のある方の支援について、支援者からご相談を受けることはあまり多くありません。その一方で、成人の発達障害の方々を対象とした自立訓練（生活訓練）と就労継続支援B型の多機能型事業所を運営しており、そこでは知的障害を伴わない発達障害の方々に出会ってきました。大学卒業後、あるいは中退して離職を繰り返している、就職できなかつたり、学齢期に不登校になり、そのまま長期間引きこもってしまったりして、

別表 発達障害の方々が抱える困難

- ◆自閉スペクトラム症
 - *人の顔（目）を見て話すのが苦手
 - *「相手の気持ちを察する」ことが困難
 - *集団行動が苦手で合わせるのが辛い
 - *雑談では何を話してよいかわからない
 - *集団での会話についていけない
 - *音や光、人に触れることに過敏。
 - *「空気を読む」ができない。わからない
 - *周囲が普通にやっていることができない
- ◆注意欠陥多動性障害（ADHD）
 - *一つの作業に集中できない
 - *片づけるのが苦手
 - *物音や話し声で集中が途切れる
 - *夢中になるとやめられない
 - *「まとめ」「簡潔に」話すのが苦手
 - *文章が長く、段落をつけられない
 - *話の要点がわからずまとめられない
- ◆学習障害（限局性学習症）
 - *計算が苦手で会計のときに戸惑う。
 - *数字の桁が増えるとわからなくなる。
 - *読むこと、もしくは書くことが苦手

思春期以降に発達障害の診断を受けた方や、その親御さんが相談に訪れました。

知的障害を伴っていたり、早い段階で診断を受けていたりすると、特別支援や福祉サービストなどがあっていく場合が多いのですが、思春期以降に診断を受けた方は、福祉につながらずに生活をしてきた方が多いように思います。また、生きづらさはあるけれど診断に至らない時期は、できないことが多いことを自分の努力不足と考えてしまいがちです。頑張れば定型発達の方のように振る舞うこともできるので、苦手なことやイヤなことを克服するために、あえて正面からぶつかってしまった人もいます。一般的には、三歳前後か

ら相手の表情や周囲の様子に反応した振る舞いや、回避の方法などを経験的に身につけていきますが、発達障害の方はそうした育ちがゆつくりです。「苦手なことは頑張っ

て克服しなければいけない」という考えから逃れられず、孤軍奮闘して自分を苦しめてしまう場合もあります。発達障害の特性ゆえの対人関係の困難や仕事上のストレスがあつても、自分の気持ちや状態が自覚できなかったり、自覚しても伝えることが難しかったりすると、うつ病や強迫性障害などの二次障害の原因になることもあります。

私が関わってきた方々も、「人間関係で問題を抱えた」「普通になる努力を強いられた」「いじめにあつたり無視されたりした」「何をしても人より時間がかかった」「簡単な作業ができなかつた」「期待に応えるよう頑張つて疲弊した」「指示の多さにパニックになっ

た」等、特性ゆえの生きづらさをうまく人に伝えることも、助けを求めるときもできず、自分なりの努力と工夫と我慢、そして挫折を繰り返してきたエピソードで溢れていました。

利用者を職員として迎えて

昨年の夏、利用者のAさんを職員として迎え入れました。Aさんは中学の時に不登校になり、通信制高校を卒業した後、一年ほど自宅で過ごしていました。「将来のことを考えるのはやめることにしたんです」という言葉が印象的でした。福祉に拒否的だったAさんは、クロスオーバー大和が有償のフリースペースの時に週一回通所するようになり、その後、障害福祉サービスに切り替わった時に、自立訓練(生活訓練)に入所しました。最初の二年間は、たびたび長期欠席をしていましたが、欠席の電話は毎日欠かしませんでした。

3年目に就労継続支援B型の体験を試み、Aさんは作業室へ入るのに抵抗感がありました。丁寧で精密な作業性を発揮して、就労継続支援B型へ移籍しました。そ

して、ようやく通所が安定した頃に、理解のある身内が他界し、再び長期欠席となりましたが、やはり欠席の電話は毎日欠かしませんでした。その間に、自力で障害者手帳を取得し、ハローワークへ通い始め、再び通所を始めると、自ら高齢者施設のボランティアや企業の体験実習に挑戦しました。その後は長欠もなく、二年かけて週五日全日通所できるようになり、リーダー的な役割も担うようになりました。「もうAさんに訓練することはないよ」と伝え、Aさんの就職を後押ししましたが、採用試験が頓挫して就職活動が進みません。そんなときに事業所の職員が家庭の事情で退職することになり、他の職員からの強い後押しもあって、Aさんに職員として勤務することを打診しました。Aさんは、少し驚いて顔を赤らめながら「やらせてもらえるなら、ぜひやってみたいです」と言いました。Aさんが利用を開始して八年目のことでした。

採用面接の時、「苦手な利用者」に作業の指示を出したり、ミーティングで司会をしたり、外部からの電話に出たりするけど大丈

夫ですか？」とAさんに聞くと、「作業の指示は今もやっているし、ミーティングも大丈夫だと思うんですが、電話はちょっと」と言っていました。Aさんは「どんなに具合が悪くても、電話で欠席の連絡をするくらいなら通所した方がマシ」なくらい電話が苦手でした。

長欠の時の毎日の電話は、休む代わりに最も苦手なことを自分に課していたというのです。私は電話には出なくてもよいと伝え、Aさんは週五日、ラッシュアワーを避けるために規定より1時間短い勤務時間で就業を開始しました。苦手なことがあるAさんですが、切り出した仕事は着実にこなします。利用者ミーティングで司会進行をしたり、作業マニュアルを作ったり、外出プログラムの企画もしています。どの作業にも精通し、物腰柔らかく誰にでも丁寧なので、他の利用者からも一目置かれていました。頑張りすぎることであるので仕事量はAさんと調整し、Aさんも戸惑うことは職員に相談しているようです。

採用から5ヶ月経ち、あれほど嫌がっていた電話に今はAさんが出て、他の職員に取り次いでくれ

ます。少し大人びて精悍な表情になり、頼りになる職員として力を発揮してくれています。

おわりに

ご本人が、自分の得意なことや苦手なことを理解し、そのことを周囲に理解してもらい、できないことを伝えたり助けを求めたり、手を借りたりするといった対策を立てることは、日々を生きるためにとっても大切な取り組みです。しかし、それは一人でできるわけではありません。Aさんと関わってわかったことは、力のあるAさんにとつて必要なのは、支援ではなく理解であつて、ご本人が理解されていることを実感できると、妥当な対策を立てて自ら変わりはじめるといふことです。表面的な共感や関わりは、その代償としてすぐに相手に変わることを求めます。しかし、理解は相手との違いを解ろうとすることであり、自分との違いを認めることであり、それは支援者自身が変わることなのだと思えます。これからも、このことを常に意識しながら、発達障害のある方々の支援に携わっていきたいと考えています。

～よこすかテレワーク～

一般社団法人 sukasuka-ippo (すかすかいっぽ) 代表理事 五本木 愛

障害児を育てる親のグループ(一社) sukasuka-ippo と横須賀商工会議所との連携事業。働きたくても外へ働きに出られないお母さんたちにそれぞれのライフスタイルに合わせた新しい働き方を提案するとともに、近年高まるアウトソーシング業務のニーズに応え、お母さんたちが持つスキルとキャリアを地域企業に還元し有効活用する仕組み。 2017年11月事業開始。

ふるさと名品オブザイヤー2017 ふるさとテレワーク〈ヒト部門〉地方創生賞受賞

「一般社団法人 sukasuka-ippo (すかすかいっぽ)」は、横須賀市

療育相談センターひまわり園(障害のある子どもが通う幼稚園)の保護者会をきっかけに生まれました。当時私は保護者会会長を二年間務め、横須賀市の障害者団体の会議やイベントなどに出席させてもらう中で、障害をもつ子どもを育てる上で必要な情報が私たち保護者のところまで届いていないことに驚きました。自分たちが欲しいと思うことは同じ障害の子どもを育てる保護者にとって同じように必要なこと。これは共有しなければ―と、まずは同じひまわり園の保護者向けに会議の内容などをまとめた園報を作成。聞きなれない言葉や難しい制度はできるだけわかりやすくし、保護者へ配布しました。これが原点となり、より多くの方へ情報発信できるようにと立ち上げたのがWEBサイト「横須賀バリアフリー子育て情報局 [sukasuka-ippo] (二〇一六年四月オープン)です。発信するだけでなくお母さん同士が話せる場を作り、声を集め、私たちに何ができるかを考えながら活動していく中で、「働きたい、だけど働け

ない」というお母さんがとても多いことを実感。

二〇一七年四月に法人化し一般社団法人 sukasuka-ippo として横須賀商工会議所へ登録したことをきっかけに、同年十一月、働きたいお母さんたちと地域企業を繋げる「よこすかテレワーク」事業を始めることとなりました。

私たち障害児を育てている親は、学校への送迎や放課後の預け先の不足、子どもの急な体調不良など、さまざまな理由で決まった時間に働きに出ることが難しいという現実があります。ですがそのために、これまで働いてきた経験やスキルを持ちながらも再び仕事に就くことを諦めてしまうのは、とてももったいないことです。

子どもが幼稚園や学校に行っている短い間だけでも働けたら。在宅でできる仕事があったら。得意なことや趣味を活かせたら。そんな希望を実現することができれば、お母さんたち自身の時間ももっと充実したものになるはずですよ。

「よこすかテレワーク」事業をスタートして早一年。地域企業との繋がりも少しずつ増え、いろいろ

なお仕事を受けられるようになってきました。

登録していただいているワーカーの方からは、「こうやって働ける機会ができて、少しでも社会参加できていることが嬉しい」「子育てや家庭ばかりに集中するのではなく、仕事をする時間ができたことで生活にメリハリが生まれた」「自分の心に余裕ができて、我が子にも穏やかな気持ちで接することができるようになった」などの声を頂いています。

お母さんたちにとって、仕事を持つということは、収入を得ることだけが目的ではありません。子どもと向き合う時間が大切なものと同じように、子育てから離れ自分のために使う時間もまた大切なのです。



一般社団法人
sukasuka

すかすかいっぽ
ippo

発行

神奈川県障害者定期刊行物協会の
〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752番地
障害者スポーツ文化センター横浜ラポール3階横浜市車椅子の会内

編集

(特非)神奈川県障害者地域作業所連絡協議会
〒222-1108 44 横浜市神奈川区沢渡4-2

045(290)0501
頒価 百五十円

「よこすかテレワーク」登録説明会のご案内

お仕事経験を活かしたい方、何かをはじめるきっかけが欲しい方、まずはお気軽に説明会にお越しください。

- ・2019年4月15日 10:30～
横須賀商工会議所 2F 特別会議室
- ・2019年5月21日 10:30～
横須賀商工会議所 2F 特別会議室

※ sukasuka-ippo WEB サイトにて要予約。

URL <http://www.sukasuka-ippo.com/>



よこすかテレワークテレワーカー向け説明会

vol.01 / 2018.01.26 (fri)

◆横須賀商工会議所より

働きたくても外で働ける状況にない子育て中のお母さん等も、働き方を変えれば再び社会とつながることが出来ます。そして、お母さん等地域に眠るスキルとキャリアを有効活用することができれば、人手不足や人件費上昇に悩む地域企業にとっても省力化の一助となるのです。

現在テレワーカー登録者は十六名。民間企業で活躍されていた方、編集やデザインのできる方、司会ができる方、webや動画の制作・編集ができる方、裁縫技術を有する方、英語が堪能な方、保育士、看護師など様々で、皆さん企業ニーズに応えられるレベルの高いスキルやキャリアを有しています。

個人個人を探し出して仕事を依頼するのは現実的ではありませんが、よこすかテレワーカーとして人材を組織化できたことで、当所としてもスキルを必要としている事業者、テレワーカーの活用を提案することが可能となりました。

例えば、製造技術はあるが図案をデータ化できないために商

品を量産できない事業者様へは、webデザインソフトに堪能なテレワーカーを、自社製品のプランド確立の為、企業キヤラクターを作りたいたいというご相談には、デザインを得意とするテレワーカーをご紹介します。他にも各社員が持つ膨大な名刺をデータ化し社内でも共有したい、マスコット人形を作りたい、一定期間のみ人手が欲しい、イベント時の保育、領収書の整理などなど、地域企業の様々なアウトソーシングのニーズに対応し大喜ばれています。

当所では、プレスリリース、webや会報での活用事例の紹介によるプロモーションの他、企業ニーズの収集やテレワーカーのスキルアップなどを行い、この仕組みを地域企業に知ってもらい有効活用してもらうことで誰もが活躍でき地域企業が発展できる経済循環をつくれるよう引き続き支援を行ってまいります。

地域企業のアウトソーシングのニーズに応える



アウトソーシング業務へのニーズを抱える

地域企業

- 堅固なバックヤード
オフィス業務
- 一時的な事務作業
- Webの定期更新
- 広告デザインなど



一般社団法人

sukasuka-ippo

障害者を持つ皆さんが中心となり、誰もがいきいきと暮らすための地域づくりを目指して活動するグループです。



横須賀商工会議所
地域に根づく力の活用推進とその機会を提供
プロモーション支援

編集後記

毎回、機関紙の内容で頭をなやませますが、期日が迫ると不思議とお知らせしようとするこ
とが出てきます。
紙面が作成される頃には、県内各地の情報を交えこれからも機関紙を作っていきたいと思
います。
(永井)